

景観マップを用いた田園共生型開発の誘導手法

九州大学大学院工学研究科	正会員	樋口	明彦
九州大学大学院工学研究科	学生会員	本田	正明
九州大学工学部建設都市工学科	学生会員	高橋	由資
九州大学工学部建設都市工学科	学生会員	三好	孝明

1. はじめに

福岡県西部に位置し玄界灘に突き出た糸島半島は、福岡市中心部からわずか20kmほどしかはなれていないにもかかわらず、福岡と唐津を結ぶ幹線交通網（JR筑肥線や国道202号線）からはずれていたため今日まで都市化の波に取り込まれることがなく、豊かで美しい田園風景をよく残す地域である。しかしながら近い将来その中央部に九州大学の移転が予定されており、それに伴う周辺の無秩序な開発が懸念されている。本稿では、こうした状況にある糸島地域にあって特に優れた田園風景が広がる志摩町に注目し、予想される開発圧力を地域の田園風景と調和させてゆくための一手法について提案する。

2. 景観マップの活用

山がちな地形を有する志摩町の景観は、変化に富んだ美しい海岸線の風景と、里山を背景として広がるおだやかな田園風景とに大別することができるが、こうした景観は、町内をめぐる生活道路からの景観として認識されることが多い。そうした道路沿いの景観を現地調査により分類・評価し、さらに、それらのうちで高く評価された部分について、景観の範囲（見渡せる範囲）を面的にプロットすることにより『景観マップ¹⁾』を作成することができる（図1中央）。この図を、国定公園、国有林、農振農用地などの開発規制からはずれ開発の起こりやすい土地の分布図（図1左端）に重ね合わせると、『景観上重要であり保全してゆくべき土地』と、『景観上重要ではなく開発が起こっても地域の景観に与える影響が少ない土地』とに分類することができる（図1右端の2つの図）。これらの地図を用いることにより今後予想される様々な開発圧力を地域の景観にできるだけ影響が少なくなるように誘導してゆくことが可能である。

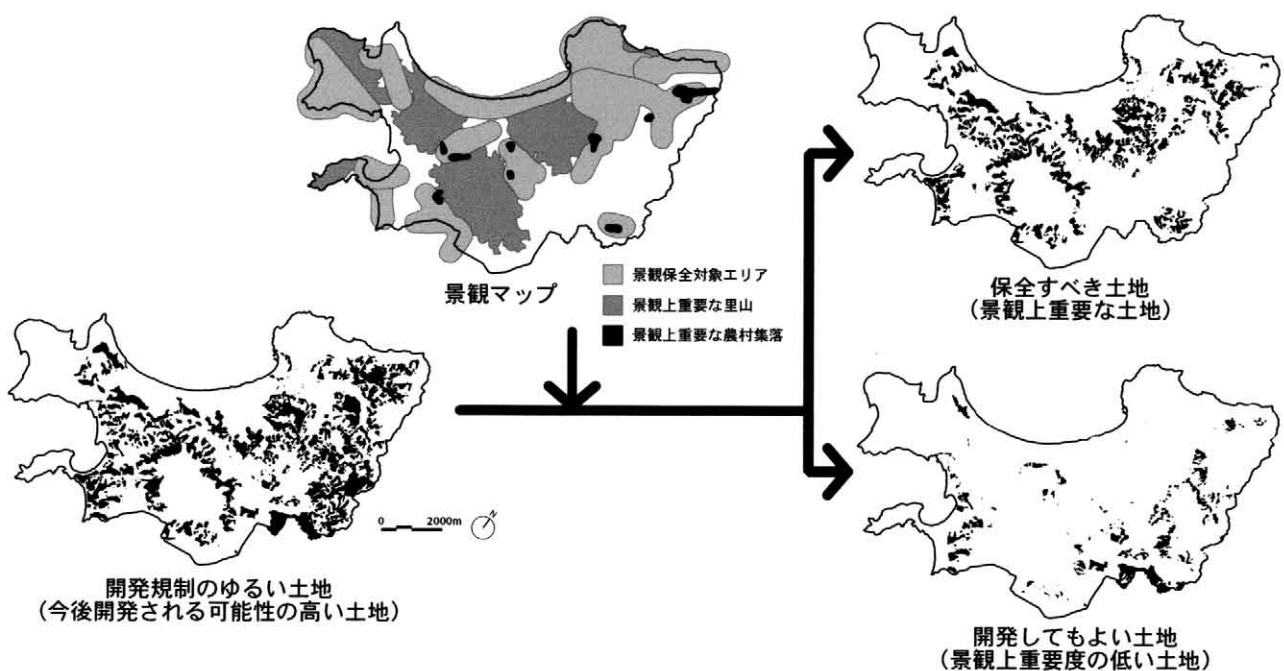


図1 景観マップを用いた開発圧力の誘導

3. 地域に適した田園共生型開発手法

デベロッパーが郊外地域で住宅開発を行う場合、道路付けの良いまとまった平坦な農地を造成したり丘陵部をならして造成をおこなうのが一般的であるが、景観マップを活用することにより浮かび上がってくる開発誘導候補地には、里山の裾野の傾斜地にある果樹園跡地（糸島地域では70年代のオレンジ自由化によって無数のミカン畑が放棄されたまま荒れ地となっている）や、農業の高齢化により手入れする人のいなくなりつつある小規模な農地などが多数含まれており、それらは現在の一般的な住宅開発手法にはまったくなじまない土地である。こうした『未利用地』を上手に活用して開発を吸収してゆくことができれば、景観に対する開発による負荷を大きく軽減することができる。図2に示した3枚のパースは(a)志摩町でよくみかけられる典型的な場所、(b)そこで従来のタイプの開発が平坦な水田をつぶして起こった場合、(c)後方の里山の裾野にある果樹園跡に開発を誘導し、周辺景観に配慮した十分な緑化と建物の形状・配置や密度の調整により田園風景を修復・保全した場合、の3つを比較したものである。

4. まとめ

ここ数十年間わが国では、地域性や環境に対する配慮がほとんどなされることなしに日本全国で同じような『郊外』が多数つくられてきたが、近年の環境や地域への関心の高まりの中で、今後地域の個性や風土に十分配慮した開発手法の登場が期待されている。本稿に紹介した志摩町における取り組みはそうした流れのうえにある。今後は、景観マップの手法にGIS技術を応用することなどにより、より合理的で使いやすい開発誘導手法を構築してゆきたい。

参考文献

- 1) Yaro, Robert D., Neil Jorgensen, Mark S. Finnen, and Harry L. Dodson. *Massachusetts Landscape Inventory*. Boston: Massachusetts Department of Environmental Management, 1982.

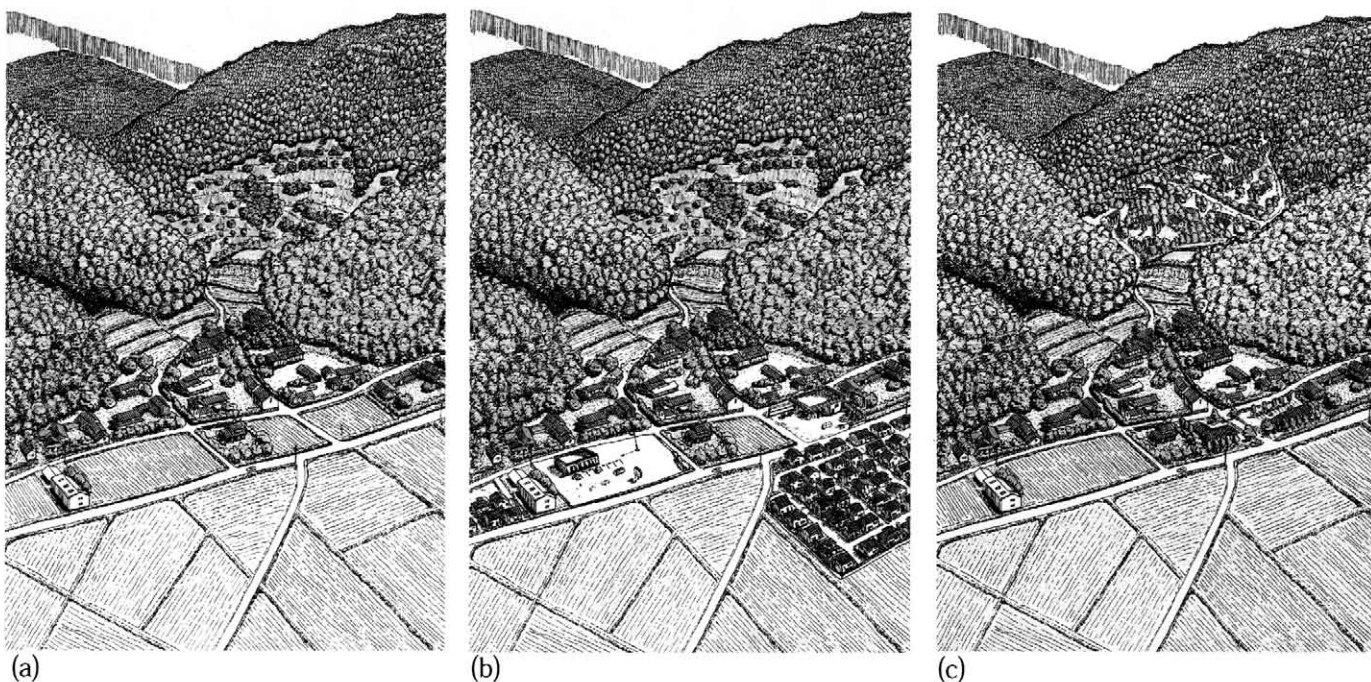


図2 典型的な志摩町の状況と二つの異なる将来イメージ

キーワード：景観、景観マップ、田園居住、志摩町

連絡先：福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学大学院工学研究科 tel: 092-642-3265 email: higuchi@doc.kyushu-u.ac.jp